様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３８４０

研究課題名（和文）近代日本の織物業における比較産地発展論

研究課題名（英文）Comparative development of weaving districts in modern Japan

研究代表者
橋野　知子（HASHINO, Tomoko）

神戸大学・経済学研究科・教授

研究者番号：３０３０５４１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西陣、桐生、福井といた近代日本における代表的な絹織物産地が、どのような要因により技術や組織面で異なる発展経路を描いたのかを明らかにすることが目的であり、同時に得られた知見を国際的に発信することに重きを置いた。近代以前から高度な絹織物業が発展していた西陣、明治半ばに羽二重生産が開始され目覚まし発展を遂げた福井、そして西陣から不断に導入した技術を生かして大衆化路線を目指した桐生という、それぞれの発展経路が明らかにされた。そのプロセスにおいて共通していたのは、要素賦存に基づいた技術導入、産地内の関連産業の成長や企業間分業の構築、人的資本の育成、同業者組合の活動だったことが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、近代日本の代表的な三つの絹織物産地に着目し、その発展経路の共通性や違いから、比較産地発展論という新分野を開拓しようとする試みである。ここで得られた発展要因は、近代の織物業のみならず、現在の地方創生にも深く関連し、また発展途上国へのインプリケーションも有する。すなわち、経済史研究にとどまらず、その成果を広く日本社会のみならず、国際的にも研究成果が生かされるという学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to find the factors which led different paths for develoment through technological choice and introduction of production organization in major silk-weaving districts such as Nishijin, Kiryu, Fukui. In addition, I attempted to deliver the result of this study to international journals and conferences. Major findings in this study was there were four common factors to promote the development of each district.
Firstly, it was significant to introduce western technologies based on factor endowment. Secondly, though it took long to raise related industries, construction of division of labor or division or producing process were important. Thirdly, accumulation of human capital was critical for development. Finally, various activities by local trade association encouraged producers for introduction of new technologies and knowledges.

研究分野：日本経済史・経済発展論

キーワード：経済史　経済発展　比較産地発展論　制度　技術導入　適正技術　適応化　サバイバル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

産地・産業集積の形成発展過程に関する研究は、経済史、経営史、開発経済学、空間経済学、経済地理学など、複数の分野の研究者によって精力的に進められてきた。なかでも日本の経済史・経営史の分野においては、織物産地や機械工業集積を主とした産地研究が伝統的に蓄積されてきただけでなく、近年では、複数の産業集積から成る「産業都市」という視点にもとづく分析も存在する（阿部武司(2012)「産業集積・産業都市・産業地域」、社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』）。しかし、個々の織物産地に関する分析が蓄積されていく一方で、複数の産地の発展経路を同時に考察することによって、発展要因の共通性や差異を積極的に見出だすといった、比較産地論の視点による分析はほとんど試みられなかった。このような研究の流れのなかで、本研究の準備としては、近代日本の産業集積の発展における制度・組織が果たした役割を重視する観点から、複数の織物産地を分析しつつそれらの発展メカニズムの比較を試みてきた（Hashino 2007 'The Rise of the Power-loom Factory in the Traditional Silk-weaving District,' Tetsuji Okazaki ed. *Production Organizations in Japanese Economic Development*, London: Routledge, pp. 14-38.; Hashino 2012 'Institutionalising Technical Education: The Case of Weaving Districts in Meiji Japan,' *Australian Economic History Review* 52 (1), pp. 25-42.; Hashino and Kurosawa 2013 'Beyond Marshallian Agglomeration Economies: The Roles of the Local Trade Association in a Meiji Japan Weaving District (1868-1912),' *Business History Review* 87; Hashino and Otsuka 2013 'Hand Looms, Power Looms, and Changing Production Organizations: The Case of the Kiryu Weaving District in the Early 20th Century Japan,' *Economic History Review* 66(3)）。その過程で、個別の産地分析を深めつつ、西陣・桐生・福井という主要な絹織物産地の発展過程を比較・分析し、新技術の導入と制度革新にかかわる類似点と相違点を明らかにしてきた（Hashino and Otsuka 2013 'Cluster-Based Industrial Development in Contemporary Development Countries and Modern Japanese Economic History,' *Journal of the Japanese and International Economies* 30, pp. 19-32）。

ところで経済史は、経済発展の過程における普遍的なメカニズムを解明しようとする点で開発経済学と親和的であるが、両者はディシプリンを同じくしつつも、分析期間と分析手法の相違から相互の対話はあまり進んでこなかった。そこで、両学問分野を架橋し建設的な対話を進めるために、第 17 回国際経済史会議（2015 年、京都）におけるパネル・セッション *Visiting Industrial Districts in History and Developing world* を組織し、歴史的に見た日本とヨーロッパ、ならびに現在成長しているアジア・アフリカにおける産業集積を同じプラットフォームの上で比較する初めての試みを行った。このことは開発経済学の分析に広い歴史的視野を与え、歴史研究の重要性の再認識につながっただけでなく、日本の歴史的経験をグローバル経済史に位置付け比較史的な視点をさらに深めるという意味でも、画期的だったと言える。そこでの問題提起は、Hashino and Otsuka eds. (2016) *Industrial Districts in History and the Developing World* (Springer)として結実した。

また、経済史の主要な英文雑誌の研究に見られるように、近年のグローバル経済史構築の機運の高まりは、日本の実証研究の厚い蓄積にもとづく知見と実証水準の高さを海外に示す絶好の機会でもある。同時に、日本と他地域との厳密な意味での比較経済史的研究の進展に対して、これまで以上に期待が寄せられている。しかしながら、グローバル経済史に日本の経験を位置付けるという挑戦は、深尾京二氏らによる超長期 GDP 等の集計的経済変数の推計の試みという興味深いプロジェクトが進められている（*The Cambridge Economic History of the Modern World*, forthcoming はその重要な成果の一つである）。一方で、産業レベルや地域レベルにおいては、十分とは言えないのが現状であった。

２．研究の目的

本申請研究の目的は、近代日本の織物産地と西洋や発展途上国の産地の研究とを比較・融合させ、産業集積に特有な発展メカニズムを比較経済史の観点から分析・解明することにある。産地・産業集積は、歴史的にも地域的にも普遍的に存在し、経済発展の原動力の一つとして重要である。またその発展メカニズムの解明は、近年の学界で精力的に研究が進められてきた「グローバル経済史」の分野に重要な貢献となるだけでなく、現在の日本で「地方創生」のもとで模索されている地域産業の再生、ひいては成熟産業が国際競争力を維持するためにいかなる進化を遂げるべきかという今日的課題に対しても、大きな政策的意義を有する。このように本研究では、グローバルな比較産地発展論を確立し、和文と英文の双方で研究成果を世に問うことを目指す。

３．研究の方法

新技術・知識の移転とそれにともなう生産組織の適応過程、ジョイント・アクション、地方・中央政府の役割という、産地の発展に不可欠であるイノベーションとそれを支えるシステムを解明するために、記述的ならびに数量的資料を可能な限り多く収集し、これまで独自に構築してきたデータベースの徹底的な補強を図る。具体的には、日本の織物産地の長期的・マクロ的な動向を把握し、同時に申請者が従来進めてきた西陣・桐生・福井の三産地の比較研究を深め、ヨー

ロッパとりわけリヨンからの技術導入の影響やアメリカの絹織物業の発展が日本の織物産地に与えた影響を明らかにしつつ、産地の発展の比較分析を試みる。同時に途上国の産業集積に関する研究とも関連づけながら、日本・ヨーロッパの産地の歴史的経験と現在の途上国とを比較し、類似点・相違点を解明することにより、革新的な比較産地発展論の構築を目指す。

４．研究成果

本研究は 2017 年度から 2019 年度までの三か年の予定であったが、①学務のため多忙をきたし研究に遅延が生じ、海外出張費が支出されなかったことのみならず国内出張も難しい状況にあったこと（ボストンでの世界経済史学会にはセッション・オーガナイザーでありながら、学務のため参加不可能となった）、②大学からの海外派遣（2020 年 2 月、リヨン第二大学）により予算に余裕が生じたため、一年間研究期間を延長し、2020 年度までの四か年となった。

2017 年度は、主として①西陣産地の資料整理ならびにサーベイ、②同産地の長期的傾向の把握のためのインタビュー、③福井産地の長期的発展の要因を分析した論文の投稿を進めた。西陣については、産地の長期的傾向を把握するために、元・機屋の関係者へのインタビューや資料収集を進め、「機械化できない製品の生産」や「大きい機屋ほど危機に弱かった」等、作業仮説を考える上で重要な意見を得た。また、現在の西陣織の新しい試みについてもインタビューを試みた。福井産地については、福井産地の形成から羽二重生産の衰退までの要因を明らかにした‘The rise and fall of industrialization and changing labor intensity: the case of an export-oriented silk weaving district in modern Japan’（大塚啓二郎氏との共著）を Osaka Workshop on Economics of Institutions and Organizations で報告し（2017 年 7 月・大阪大学）、経済学者・経済史家からの意見を仰ぎ、本論文はのちに *Australian Economic History Review* 60(1)、2019 年に掲載された。

2018 年度は、①現代西陣における生産状況に関する情報収集（於・西陣織物工業組合、京都市産業技術研究所）、②西陣について『工場通覧』を中心とする資料の整理・入力、③全国の産地類型化の準備、④本研究が比較の対象とする 3 産地を取り巻き、これらの位置づけを明確にするために進めている日本全国の織物産地の類型化作業については、引き続き『紡織要覧』の整理・入力を中心に作業を進めた。三産地の比較そのものについては、「比較産地発展論序説：西陣から桐生へ、さらに福井へ」（『国民経済雑誌』219(1)、2019 年）として、中間報告・仮説提起的な論考をまとめた。なお、*The Cambridge Economic History of the Modern World* I, forthcoming に寄稿する共同論文について（Schulze, Caruana Galizia and Hashino, ‘First and Second Nature Geography’と共著）代表して報告した（Hitotsubashi Summer Workshop, 2018 年 8 月）。

2019 年度は、特に①比較産地論のためのベース作りと同時に、②西陣産地の歴史的な発展に関する本格的な分析ならびにリヨンから西陣への技術移転の比較史的考察、ならびに③工場別のデータ系列の整理について作業を進めた。サバティカル・イヤーであったこともあり、内外でこれまでの研究成果を報告する機会に恵まれた。これまでの研究（Hashino 2016 ‘Contrasting development paths of silk-weaving districts in modern Japan’ ならびに 橋野 2019「比較産地発展論序説：西陣から桐生へ、さらに福井へ」）にさらにデータや資料から得られた知見を加え、再度考察を進め、以下のワークショップで研究報告をし、議論を深めた（2019 年 7 月・東京大学 経済史研究会、8 月小樽商科大学 SWET、9 月アジア成長研究所、10 月プレトリア大学日本研究センター）。福井については、「輸出羽二重と精練業」について講演し（2019 年 11 月、於・勝山はたやフォーラムでのシンポジウム）、関連産業の重要性についての考察を深めた。西陣については、西陣の長期的な数量データ系列の整備を進めるとともに、アネクドータルな資料も加えることによって、論考‘From Lyon to Kyoto: Modernization of traditional silk-weaving district in Japan, 1887-1929’作成のための準備をした。リヨン第二大学の Pierre Vernus 氏のアドバイスを受け、仏語文献・資料についてのアクセスを得ることができ、2020 年 2 月には同大学で上記の内容について研究報告をした。なお、『工場通覧』に記載されている工場別データ系列の整備については、京都府のデータの入力、クリーニングが終了し、まだ荒い段階ではあるが、②の分析にも一部使うことができた。

最終年度となった 2020 年度は、昨年度のリヨンでの調査や研究報告にもとづき、近代西陣における「産地」としての発展に関して、数量的・定性的資料の整理ならびに論文の作成 に従事した。西陣の機業や組合を訪問し、技術的な問題について不明な点をインタビュー調査する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大のため本年度はやむを得ず見送った。2021 年 1 月には、*Centuries of Cloth: Historical Approaches to the Story of Textile* というテーマの若手ワークショップ (Economic History Society と Royal Historical Society による)への参加の機会を得て、‘From Lyon to Kyoto: Modernization of Traditional Silk-Weaving District in Japan, 1887-1929’を報告し、イギリスの John Style 氏より重要なコメントを受けた。なお、2020 年夏にパリで開催予定の国際経済史学会（World Economic History Congress）に参加し、19－20 世紀の絹の生産・消費を世界的なパースペクティ ブで分析する共同研究のパネル・セッション（*Silk : Trades, production and skills in a Eurasian perspective from the 17th to the mid 20th century*. Mau Chuan-Hui 氏（台湾）、Pierre Vernus 氏、橋野が共同組織者）で報告予定だったが、そのプレ・ワークショップ（於・リヨン第二大学、2020 年 5 月）も含め、延期となった。その後 2022 年の WEHC 開催 に向け、年度は超えてしまったが 2021 年 5 月に Zoom でプレ・ワークショップが開催され、‘From Lyon to Kyoto: Modernization of Traditional Silk-Weaving District in Japan, 1887-1929 ’(mimeo)を報告した。同内容は、2021 年 5 月 に社会経済史学会の自由論題でも報告し、フランス経済史の立場から齋藤佳史

氏より日本がリヨンに学んだ意義について有益な教示を受けた。西陣研究の継続が本年度の主な課題となったが、同時に 1900-1920 年の福井の個別企業に関するデータの整理を終え、分析・論文の執筆を進める準備は整った。そして現在は、桐生、福井、西陣に関して、同時期の発展の特徴や共通点ついて把握・考察でき、現在は、『比較産地発展論』の執筆作業に着手している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Hashino, Tomoko and Otsuka, Keijiro	４．巻 60-1
２．論文標題 The rise and fall of industrialization: The Case of a silk weaving district in modern Japan	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Australian Economic History Review	６．最初と最後の頁 41, 72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/aehr.12182	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 橋野知子	４．巻 219
２．論文標題 比較産地発展論序説－西陣から桐生へ、さらに福井へ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国民経済雑誌	６．最初と最後の頁 95-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 橋野知子
２．発表標題 社会経済史学の魅力の発信方法を考える
３．学会等名 社会経済史学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 橋野知子
２．発表標題 英文書籍出版による国際発信
３．学会等名 経営史学
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomoko Hashino
２．発表標題 From Lyon to Kyoto: Modernization of traditional silk-weaving district in Japan, 1887-1929 ’
３．学会等名 'Centuries of Cloth: Historical Approaches to the Story of Textile' (Economic History Society と Royal Historical Societyによる)（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Donze, Pierre-Yves and Fujioka, Rika	４．発行年 2018年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 287 (pp. 257-274)
３．書名 Global Luxury: Organizational change and emerging markets since the 1970s	

１．著者名 Boradberry, Stephen and Fukao, Kyoji	４．発行年 2021年
２．出版社 Cambridge University Press	５．総ページ数 400
３．書名 The Cambridge Economic History of the Modern World I	

〔産業財産権〕

〔その他〕

【研究会報告】
・'The rise and fall of industrialization and changing labor intensity: the case of an export-oriented silk weaving district in modern Japan ’（共著）, Osaka Workshop on Economics of Institutions and Organizations（2017年7月・大阪大学）。

・‘ First and Second Nature Geography ’（共著）、Hitotsubashi Summer Workshop（ 2018年8月・一橋大学）。

・‘ Contrasting development paths of silk-weaving districts in modern Japan ’ （2019年7月・東京大学 経済史研究会、8月小樽商科大学 SWET、9月アジア成長研究所、10月南アフリカ共和国・プレトリア大学日本研究センター）。

・「輸出羽二重と精練業」（2019年11月、勝山はたやフォーラムでのシンポジウム）

・‘ From Lyon to Kyoto: Modernization of traditional silk-weaving district in Japan, 1887-1929 ’（2020年2月・リヨン第二大学、2020年5月・リヨン第二大学で開催予定だったが延期され、Prewokshop for World Economic History Congress in Paris 2022, Silk : Trades, production and skills in a Eurasian perspective from the 17th to the mid 20th centuryとして、2021年5月にZoomで実施）。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	Dr. Pierre Vernus	LAHHRA	リヨン第二大学	